

令和 7 年度国庫調査研究
(歯科口腔保健調査研究事業)
実施報告書

都立知的障害特別支援学校（小学
部）における摂食機能および食行
動の問題点に関するアンケート

令和 8 年 6 月

東京都立心身障害者口腔保健センター

1. 調査の概要

(1) 調査の目的

日常生活を送るうえで必要な基本的生活習慣には、睡眠、排泄、清潔、着脱衣、食事がある。その中でも食事、つまり「食べること」に関しては、平成 17 年に施行された食育基本法をきっかけに関心が高まっている。「食べること」は健康を維持・増進させる役割があるため、家庭だけでなく教育現場でも食育を行い、乳児期から食事の楽しさを感じてもらう事は大切である。特に特別支援学校では教員が障害児に食事の支援を行う際には、「食事の楽しさ」を感じてもらうだけではなく、窒息や誤嚥予防など安心・安全な食事を提供することも求められ、様々な点に配慮する必要がある。東京都立心身障害者口腔保健センター（以下、当センター）では障害児・者を対象に摂食嚥下機能療法の指導を行っているが、指導日に教員が来院することは難しいため学校との連携も少なく、教員から食事に関する問題点、不安な点を直接聞く機会は少ない。

今回、都立知的障害特別支援学校（小学部）の食事場面の実態を調査し、教員が日ごろ感じている問題点や不安な点を抽出する。それを基に当センターの摂食嚥下機能療法や研修事業の指導内容の充実を図ること。さらに、学校ごとの問題点等について検討し、学校全体でできる適切な食事場面の支援を図ることを目的としてアンケートを行った。

(2) 調査対象

都立知的特別支援学校（小学部）の学校および教員を対象とした。

①学校全体の質問は計 28 校のうち同意が得られた 26 校を対象とした。

②教員への質問は承認が得られた 26 校の各学校から教員 20 名、うち 1 校は教員 5 名の合計 505 名を対象とした。

(3) 実施方法

本調査は、8020 運動・口腔保健推進事業「調査研究事業」として東京都が公益社団法人東京都歯科医師会（指定管理者）に委託し、東京都立心身障害者口腔保健センターにおいて企画・実施した。

(4) 調査期間

2025 年 9 月 11 日から 2026 年 10 月 8 日。

(5) 調査内容

調査で使用したアンケート用紙を 27 頁～31 頁に別添する。

(6) 調査方法

調査対象小学校にアンケート用紙を送付し、回答（無記名）を依頼し回答を得た。

(7) 倫理的配慮

本調査は、公益社団法人日本障害者歯科学会倫理審査・利益相反委員会の承認を得て実施した。

【承認番号】25030

【承認日】2025 年 8 月 22 日

2. 結果

回収総数

学校全体：26/28 校、回収率 92.9%。教員：491/505 名、回収率 97.2%。

(1) 学校全体の質問（1 校につき 1 回答）

①人数について

26 校の合計「児童数」4,372 名、「教員」1,447 名、「看護師」66 名、「栄養教諭」2 名、「校内所属の栄養士」24 名、「介護職」0 名、「その他」2 名であった（表 1）。

表 1 人数について (名)

	児童数	教員	看護師	栄養教諭	校内所属の栄養士	介護職	その他
1	227	67	5	0	1	0	0
2	327	99	0	0	2	0	0
3	96	33	0	0	1	0	0
4	127	48	0	0	1	0	0
5	3	5	0	0	0	0	0
6	129	42	0	0	1	0	0
7	92	35	3	0	2	0	0
8	241	78	7	0	1	0	0
9	243	72	4	0	2	0	0
10	186	59	0	0	1	0	0
11	137	48	0	0	1	0	0
12	199	60	0	0	0	0	0
13	275	82	0	1	0	0	1（非常勤看護師）
14	173	58	9	0	2	0	1（医療ケア担当看護師）
15	171	53	0	0	2	0	0
16	163	60	0	0	1	0	0
17	208	62	4	0	1	0	0
18	43	21	0	0	0	0	0
19	111	40	17	0	0	0	0
20	125	45	0	0	2	0	0
21	175	53	6	0	0	0	0
22	247	77	2	0	0	0	0
23	122	42	3	0	1	0	0
24	195	91	0	0	1	0	0
25	239	77	1	1	0	0	0
26	—	—	—	—	—	—	—
27	118	40	5	0	1	0	0
28	—	—	—	—	—	—	—
合計	4,372	1,447	66	2	24	0	2

②校内職員への「食育」についての取り組み（研修）はされていますか。

「はい」15校（58.0%）、「いいえ」9校（34.0%）、「未回答」2校（8.0%）であった（図1）。

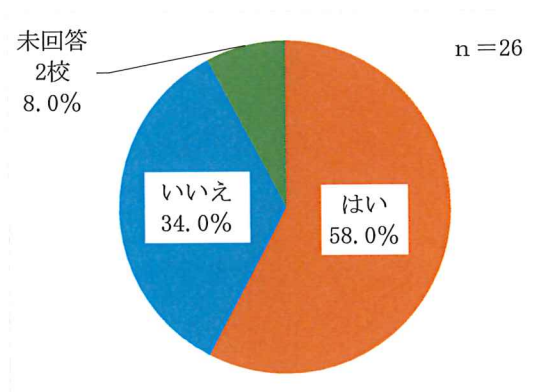


図1 校内職員への「食育」についての取り組み（研修）

③定期的に食事に関する専門的な指導を受けていますか。

「毎月」4校（15.4%）、「3月に1回」5校（19.2%）、「半年に1回」5校（19.2%）、「1年に1回」5校（19.2%）、「必要な時」5校（19.2%）、「ない」1校（3.9%）、「その他」1校（3.9%）で、「4月、6月、12月の計3回」であった（図2）。

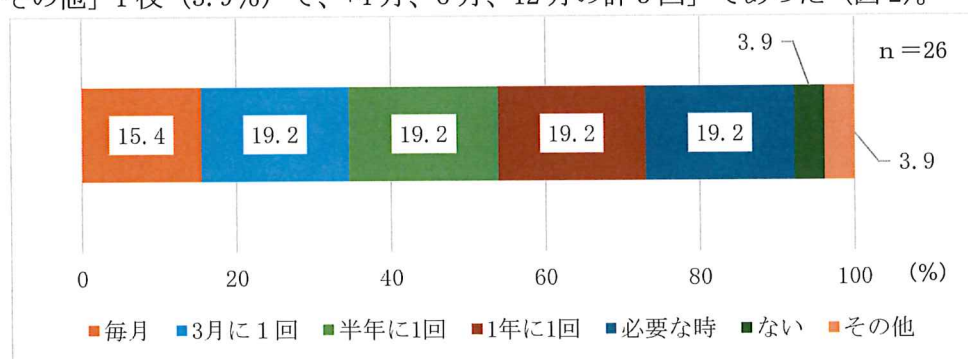


図2 定期的に食事に関する専門的な指導

④食事に関する専門的な指導はどの職種から受けていますか（複数回答可）。

「摂食指導に係る歯科医師」18校、「言語聴覚士」10校、「校内所属の栄養士」7校、「作業療法士」3校、「理学療法士」3校、「歯科衛生士」2校、「学校医」1校、「看護師」1校、「学校歯科医」0校、「栄養教諭」0校、「いない」0校、「その他」3校で「摂食指導アドバイザー、養護教諭、摂食指導の外部専門医」であった（図3）。

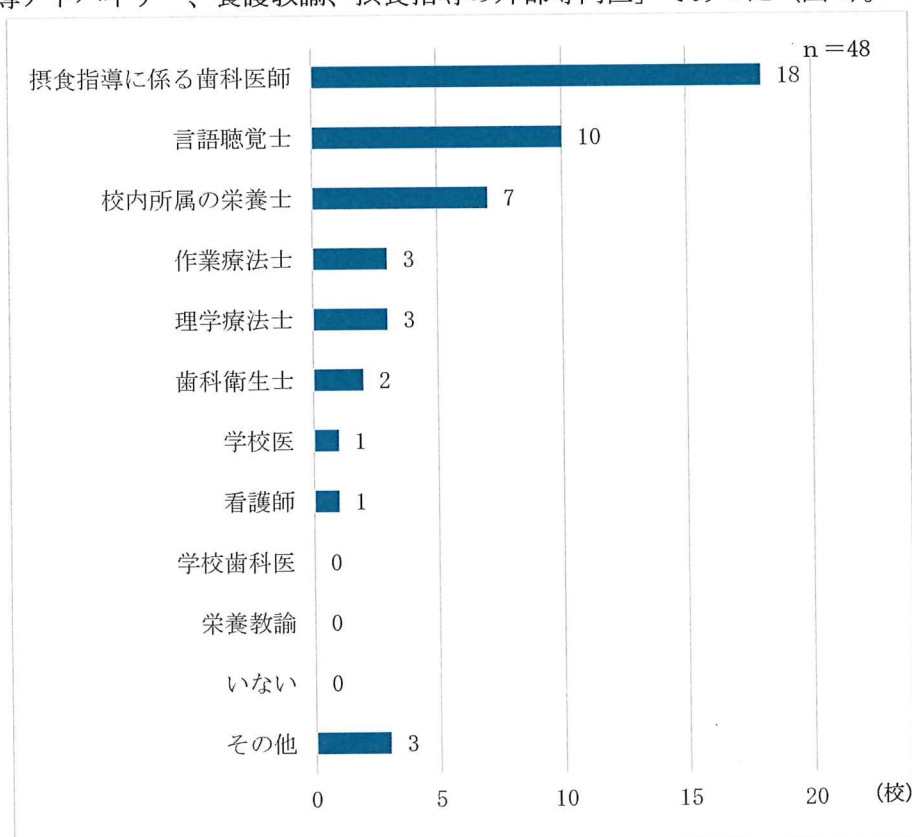


図3 食事に関する専門的な指導はどの職種

⑤栄養教諭または校内所属の栄養士による栄養指導はされていますか。

「はい」11校（42.0%）、「いいえ」15校（58.0%）であった（図4）。

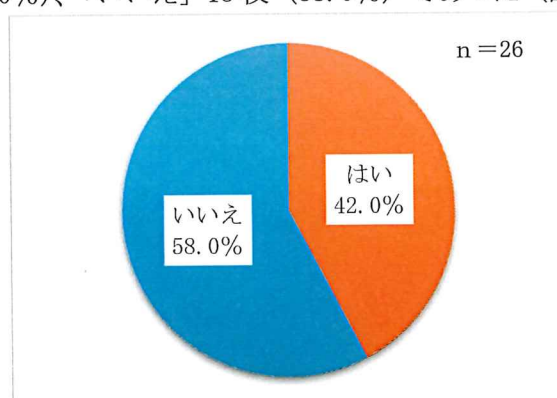


図4 栄養教諭または校内所属の栄養士による栄養指導

⑥食事の際のアクシデントはありましたか。

「はい」 4 校 (15.0%)、「いいえ」 22 校 (85.0%) であった (図 5)。

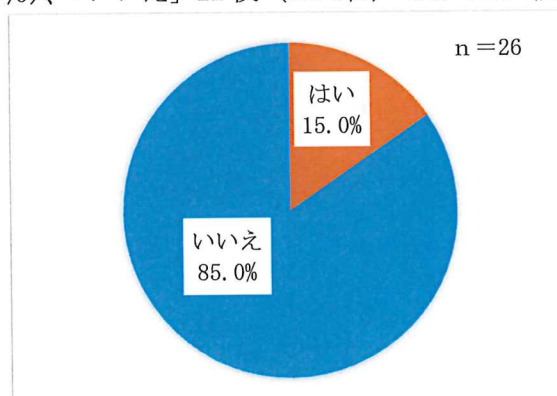


図 5 食事の際のアクシデント

⑦質問⑥で「はい」に回答した場合、アクシデントの事象について (複数回答可)。

「窒息」 3 校 (75.0%)、「誤嚥」 1 校 (25.0%)、「アナフィラキシー」 0 校 (0%) であった (図 6)。

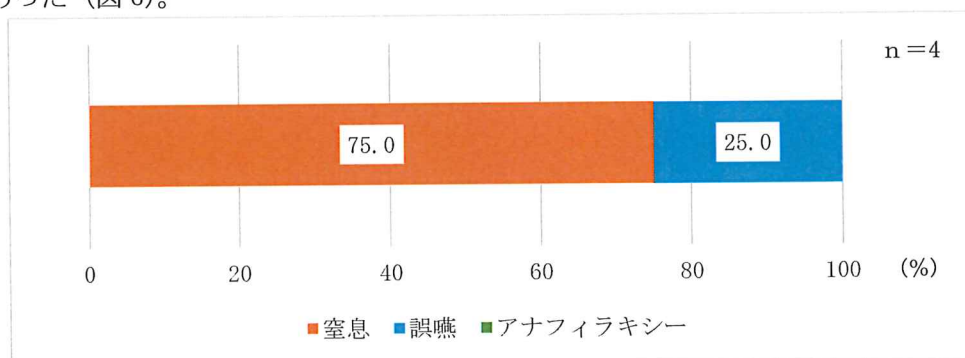


図 6 アクシデントの事象

⑧窒息予防、対処に関する校内職員への研修をしていますか。

「はい」 19 校 (73.0%)、「いいえ」 7 校 (27.0%) であった (図 7)。

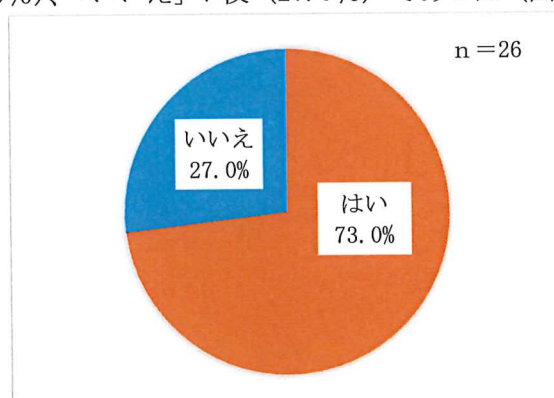


図 7 窒息予防、対処に関する校内職員への研修

(2) 教員への質問

対象は自食可能な児童（脳性麻痺の児童や経管栄養の児童は対象としない）

1) 教員、児童の基本事項

①職歴について（知的障害児の担当歴）

「3年未満」136名(27.7%)、「3年以上5年未満」57名(11.6%)、「5年以上10年未満」94名(19.1%)、「10年以上20年未満」137名(27.9%)、「20年以上」67名(13.6%)であった（図8）。

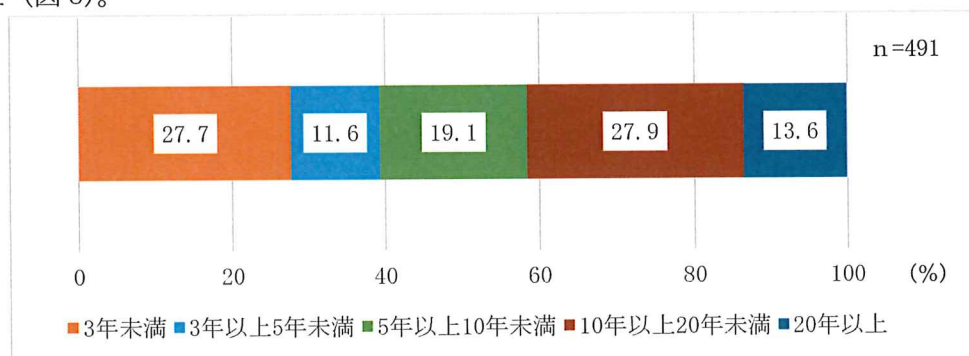


図8 職歴

②現在担当している児童の年代

「低学年(1、2年生)」185名(37.7%)、「中学年(3、4年生)」156名(31.8%)、「高学年(5、6年生)」150名(30.5%)であった（図9）。

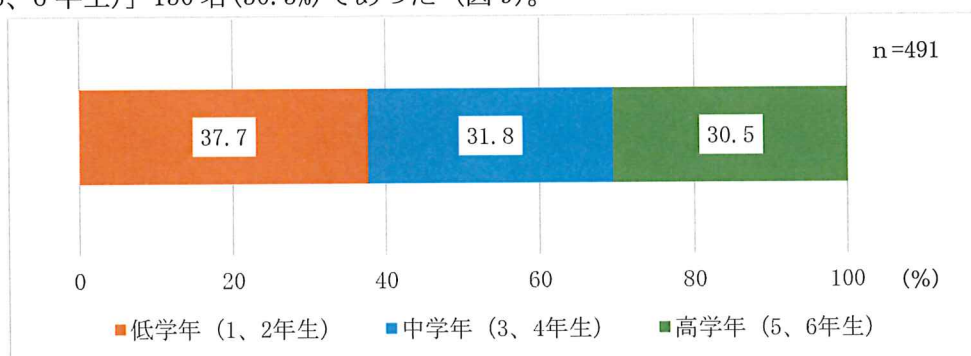


図9 現在担当している児童の年代

③担当しているクラスは何名ですか。

「1名」4名(0.8%)、「2名」33名(6.7%)、「3名」95名(19.3%)、「4名」51名(10.4%)、「5名」119名(24.2%)、「6名」184名(37.5%)、「7名」1名(0.2%)、「8名」2名(0.4%)、「12名」1名(0.2%)、その他「学年付き」1名(0.2%)であった(図10)。

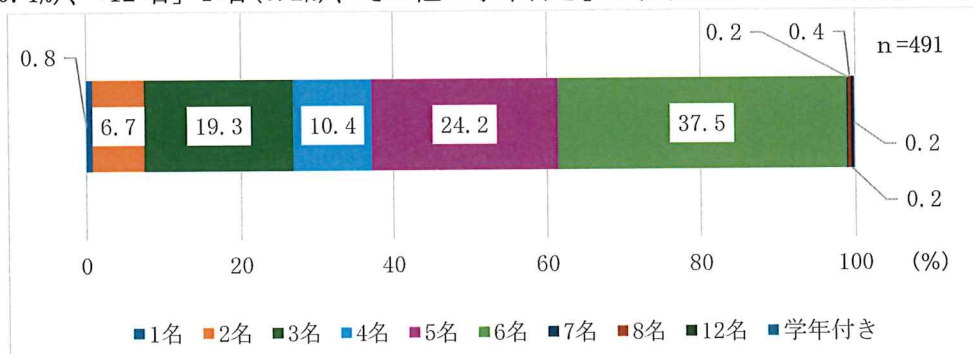


図10 担当しているクラスの人数

④給食時は、教員1名に対して何名の児童を担当していますか。

「1名」21名(4.3%)、「2名」102名(20.8%)、「3名」150名(30.5%)、「4名」69名(14.1%)、「5名」75名(15.3%)、「6名」73名(14.9%)、「7名」1名(0.2%)であった(図11)。

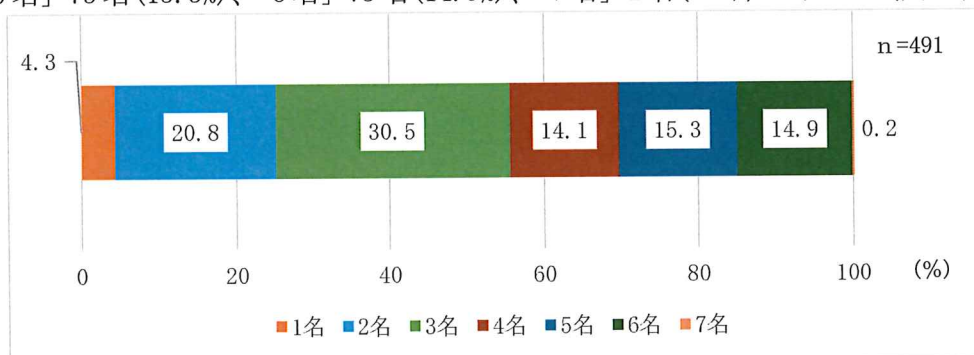


図11 担当している人数

⑤食事場で困ると思うことはありますか。

「ある」157名(32.0%)、「まあまあある」237名(48.3%)、「あまりない」89名(18.1%)、「ない」8名(1.6%)であった(図12)。

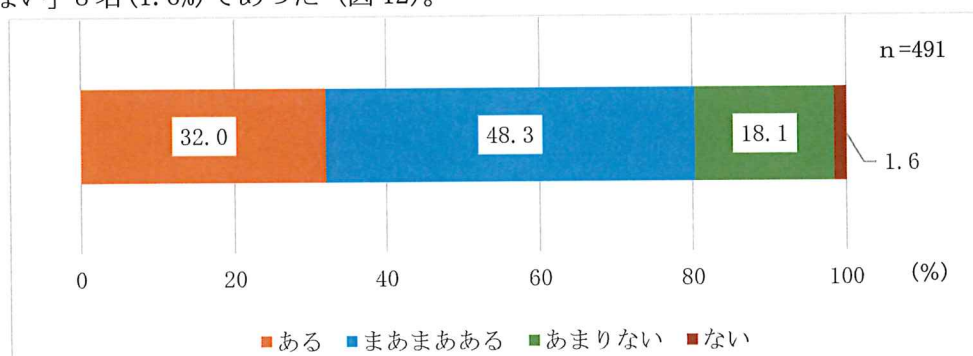


図12 食事場で困ると思うこと

⑥質問⑤で困ると思うことはどんな内容ですか(複数回答)。

「介助方法」 251 名 (38.0%)、「食事時間」 119 名 (18.0%)、「人員配置」 113 名 (17.1%)、「食形態」 61 名 (9.2%)、「場所」 19 名 (2.9%)、「その他」 98 名 (14.8%)であった(図 13)。

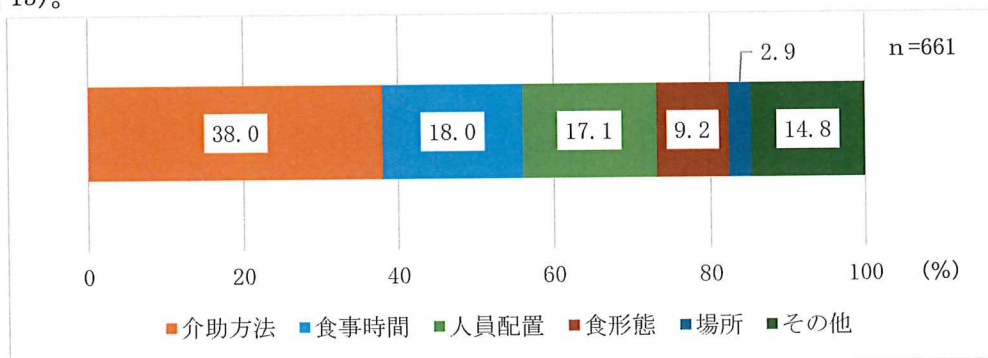


図 13 質問⑤で困ること

【その他】

- ・噛まない ・咀嚼について ・噛まずに食べている(中学年)
- ・ほとんど噛まずに飲み込んでしまう児童に対する咀嚼の指導(高学年)
- ・丸飲み ・苦手なものを丸呑みする ・食べこぼし ・こぼす ・食べ方
- ・食べ物の取り込み方 ・一口量が多いときがある ・一口量の定着(高学年)
- ・早食い ・食事に対する集中力 ・食事の仕方のこだわり
- ・食べ方についてのこだわり(中学年) ・食べ方 ・食べムラ ・立ち歩き
- ・食事中の立ち歩き(低学年) ・遊び食べ ・手づかみが治らない(中学年)
- ・姿勢(中学年)
- ・食具の持ち方指導 ・食具の使い方の指導(低学年)
- ・スープの飲みづらさを感じている児童への対応(中学年)
- ・食具の使い方、食事のマナー面や食具の正しい使い方など個々の課題の指導(中学年)
- ・食事マナー ・食事マナーの定着(高学年) ・食事マナーの指導
- ・食器の持ち方姿勢やマナーなどの指導の仕方などまたそこまで手が回らない
- ・偏食の指導 ・偏食の児童へのアプローチ(中学年)
- ・好き嫌い ・苦手な物を食べるためのアプローチ ・苦手なものの食べさせ方
- ・おうちの方は色々食べてほしい願いがあるが偏食があり、どこまで頑張ったらよいか悩む時がある(中学年)
- ・アレルギー児と一緒に食事をするものの不安
- ・アレルギー児がいる場合の安全管理
- ・アレルギー対応への配慮
- ・口腔過敏 ・反芻の対策法(食後に吐き戻しがある)
- ・児童への対応(中学年)
- ・一人ずつ丁寧にすることが困難
- ・やりとりが必要
- ・指導の人数比的に集中して指導できない(中学年)
- ・食事指導出来ない
- ・食べない児童がいる(低学年)
- ・あまり食べない

- ・食事量
- ・偏食や食べ遊びがひどいのでマンツーマンにつかざるを得ない
- ・児童が給食に気持ちが向かない時がある
- ・書類の都合上食形態の変更困難

⑦給食の食形態について(複数回答)

「切らないでそのまま(普通食)」747名(33.1%)、「一口大(普通食)」1,044名(46.2%)、「刻み(普通食)」276名(12.2%)、「刻み+とろみ」43名(1.9%)、「ペースト食」72名(3.2%)、「その他」77名(3.4%)であった(図14)。

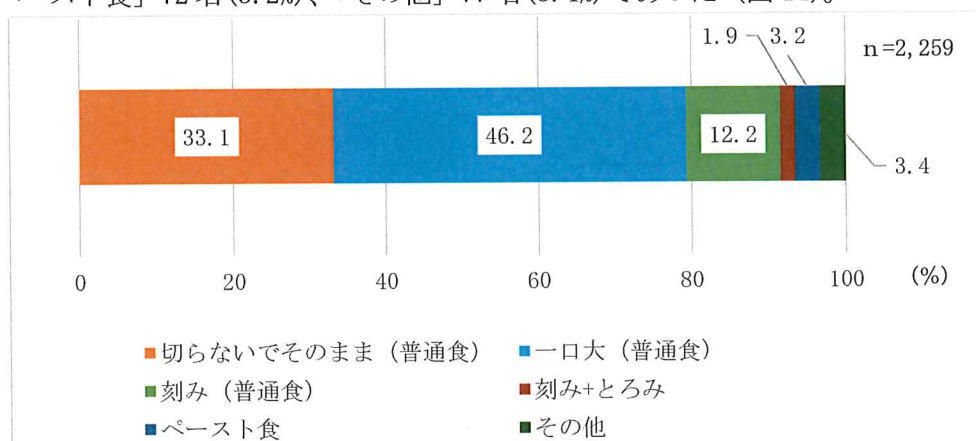


図14 給食の食形態

【その他】

- ・中期食(中学年) ・野菜など苦手な物は刻み(中学年) ・後期食
- ・後期食(高学年) ・お弁当(高学年)
- ・食材ごとに分ける(主食は普通、その他の食材は後期食)
- ・給食を食べない ・かじりとれる形態
- ・自宅からのお弁当おかずは一口大(プリン、食材によって小豆大)
- ・宗教食弁当
- ・偏食のある児童に対しては食材に応じて刻み
- ・具材により調整(一口大→刻み) ・注入とペースト食との併用
- ・栄養剤イノラス®

⑧水分にトロミをつけている児童はどのくらいいますか。

「2割未満」480名(97.8%)、「2~4割未満」8名(1.6%)、「4~6割未満」2名(0.4%)、「6~8割未満」1名(0.2%)、「8割以上」0名(0%)であった(図15)。

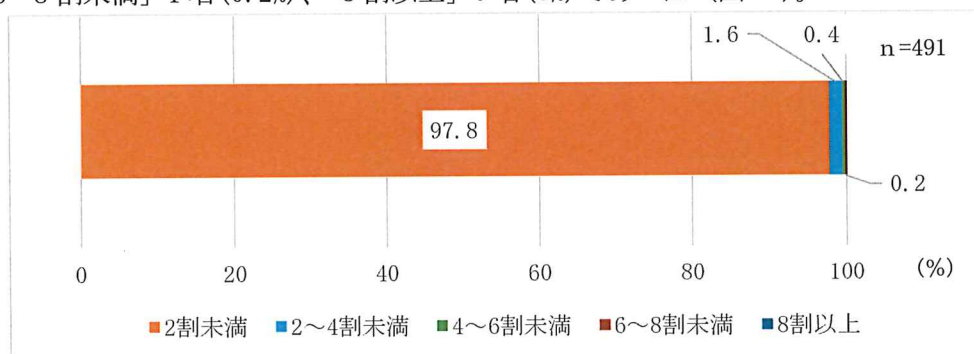


図15 水分にトロミをつけている児童

⑨水分を十分に摂れてない児童はどのくらいいますか。

「2割未満」419名(85.3%)、「2～4割未満」59名(12.0%)、「4～6割未満」11名(2.2%)、「6～8割未満」1名(0.2%)、「8割以上」1名(0.2%)であった(図16)。

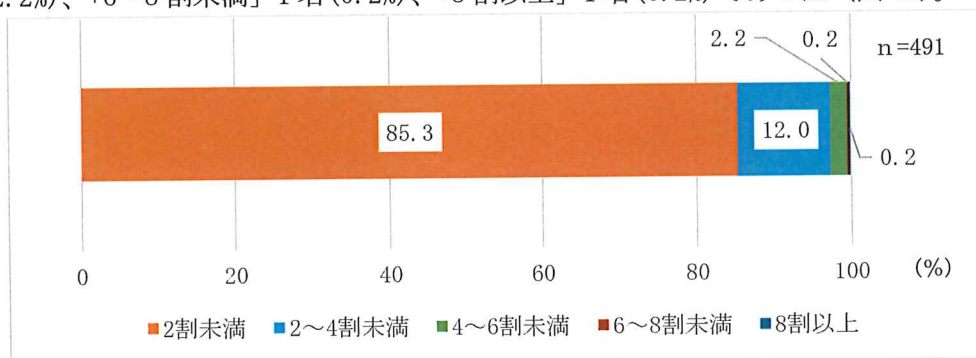


図16 水分を十分に摂れてない児童

⑩食べ物のアレルギーがある児童がいますか。

「はい」152名(31.0%)、「いいえ」339名(69.0%)であった(図17)。

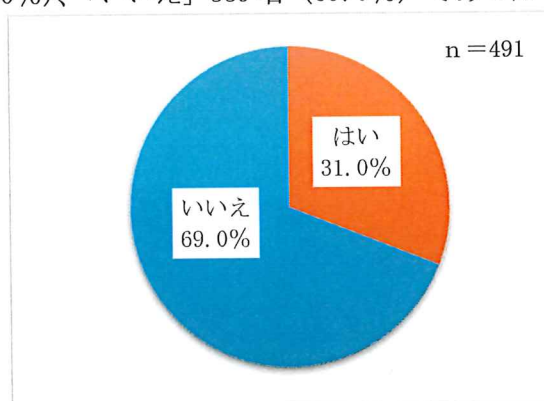


図17 食べ物のアレルギーがある児童

⑪栄養状態(ローレル指数や体形などから)について気になる児童はいますか。

「はい」272名(55.0%)、「いいえ」219名(45.0%)であった(図18)。

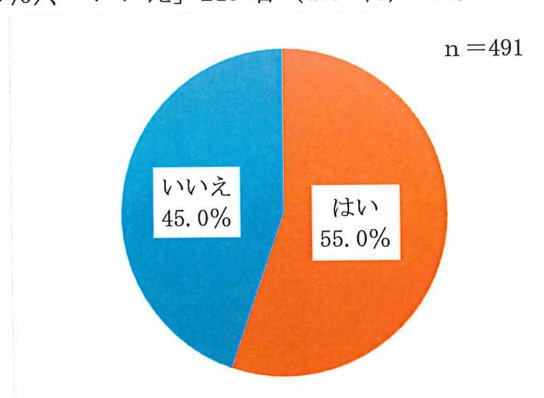


図18 栄養状態(ローレル指数や体形などから)について気になる児童

⑫質問⑪で「はい」の場合の児童について

・肥満の児童

「2割未満」175名(64.3%)、「2～4割未満」73名(26.8%)、「4～6割未満」19名(7.0%)、「6～8割未満」5名(1.8%)、「8割以上」0名(0%)であった(図19)。

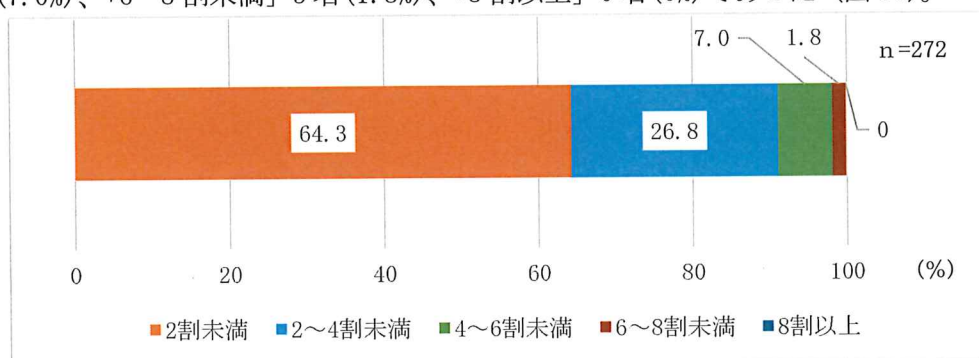


図19 肥満の児童

・肥満傾向の児童

「2割未満」173名(63.6%)、「2～4割未満」80名(29.4%)、「4～6割未満」14名(5.1%)、「6～8割未満」4名(1.5%)、「8割以上」1名(0.4%)であった(図20)。

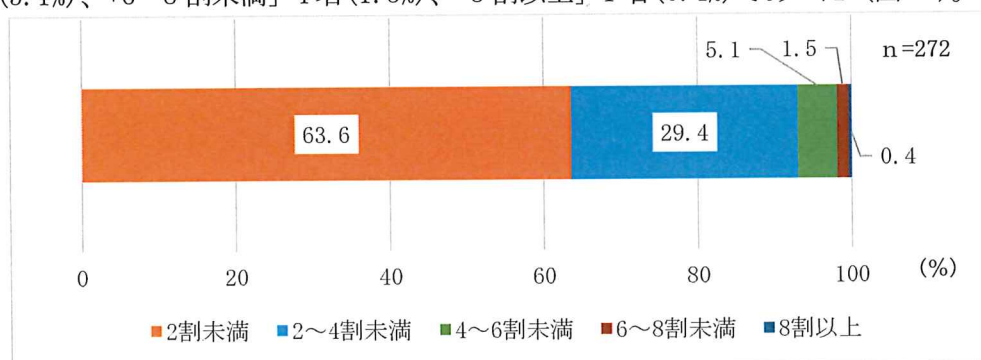


図20 肥満傾向の児童

・やせ気味の児童

「2割未満」190名(69.9%)、「2～4割未満」65名(23.9%)、「4～6割未満」12名(4.4%)、「6～8割未満」3名(1.1%)、「8割以上」2名(0.7%)であった(図21)。

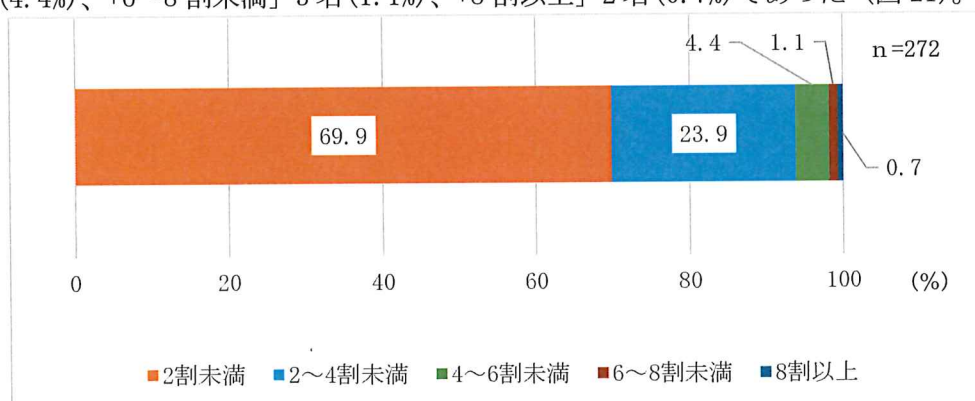


図21 やせ気味の児童

⑬給食で困ったときに相談できる方はいますか。

「はい」 444 名 (90.0%)、「いいえ」 47 名 (10.0%) であった (図 22)。

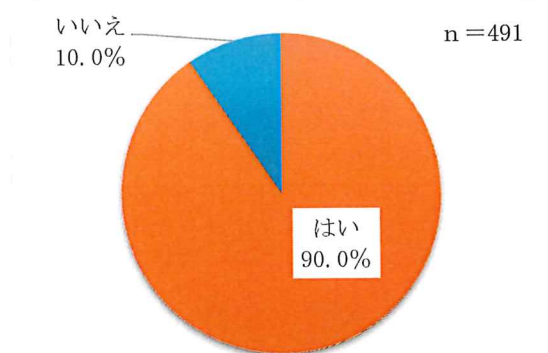


図 22 給食で困ったときに相談できる方

⑭質問⑬で「はい」の回答の方はどなたに相談していますか (複数回答)。

「校内所属の栄養士」 111 名、「摂食指導に係る歯科医師」 99 名、「言語聴覚士」 90 名、「栄養教諭」 73 名、「作業療法士」 44 名、「理学療法士」 21 名、「学校医」 13 名、「学校歯科医」 11 名、「歯科衛生士」 9 名、「いない」 6 名、「看護師」 3 名、「その他」 121 名であった。その他の多くは、先輩教員および同僚であった (図 23)。

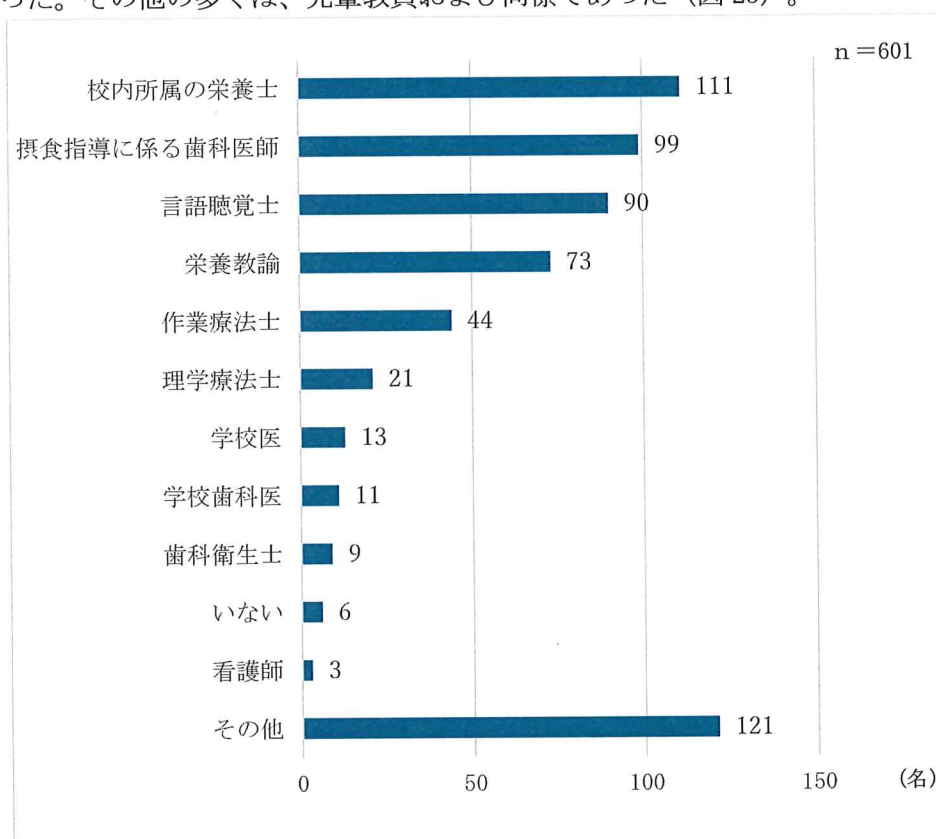


図 23 質問⑬で「はい」の回答の方はどなたに相談していますか

【その他】

- ・先輩教員 ・同僚 ・養護教諭 ・保健給食部の教員 ・心理士
- ・外部専門員 (摂食) ・障害者歯科学の教授 ・外部言語聴覚士

⑮家族と学校で食形態の違いはありますか。

「はい」 143 名 (29.0%)、「いいえ」 348 名 (71.0%) であった (図 24)。

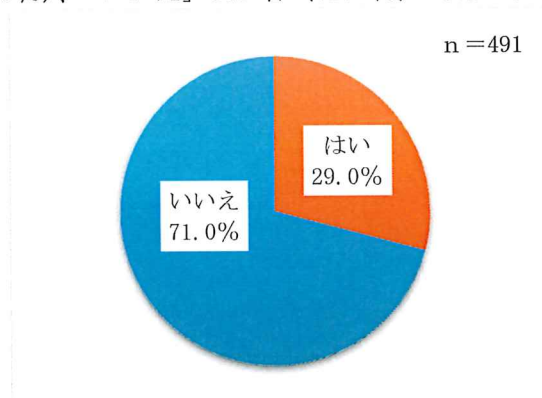


図 24 家族と学校で食形態の違い

⑯摂食に関する勉強会があれば受けてみたいですか。

「はい」 433 名 (88.0%)、「いいえ」 58 名 (12.0%) であった (図 25)。

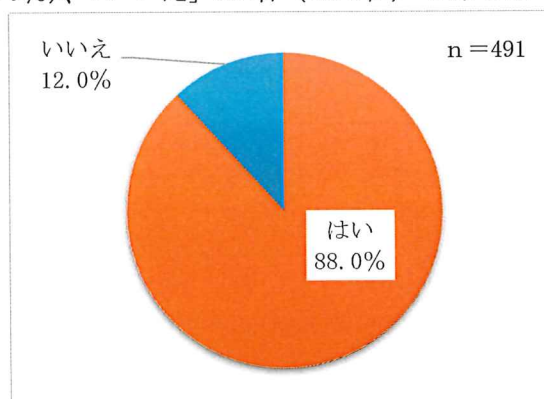


図 25 摂食に関する勉強会があれば受けてみたい

⑰定期的な専門職からの摂食指導は必要と感じますか。

「はい」 450 名 (92.0%)、「いいえ」 41 名 (8.0%) であった (図 26)。

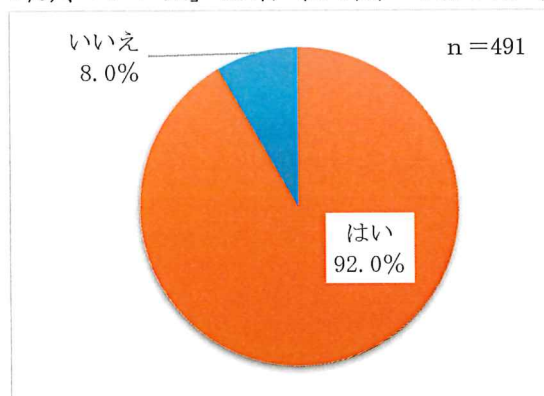


図 26 定期的な専門職からの摂食指導は必要

2) 担当児童の摂食嚥下機能について気になることはありますか。

①噛まない

「2割未満」219名(44.6%)、「2～4割未満」150名(30.5%)、「4～6割未満」61名(12.4%)、「6～8割未満」40名(8.1%)、「8割以上」21名(4.3%)であった(図27)。

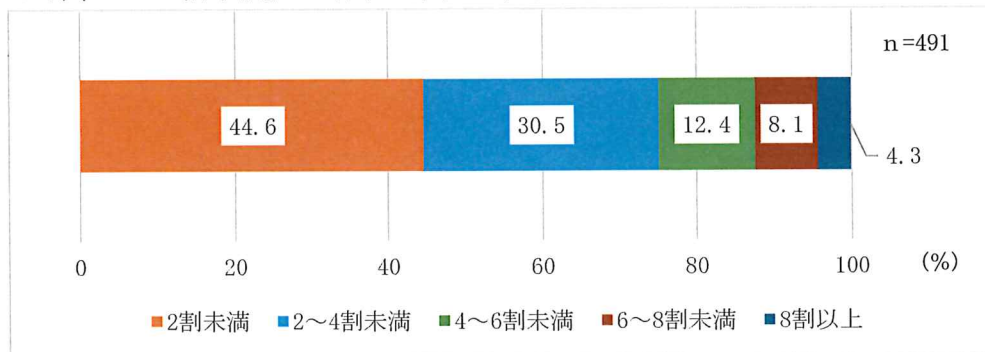


図27 噛まない

②丸飲み

「2割未満」325名(66.2%)、「2～4割未満」105名(21.4%)、「4～6割未満」37名(7.5%)、「6～8割未満」15名(3.1%)、「8割以上」9名(1.8%)であった(図28)。

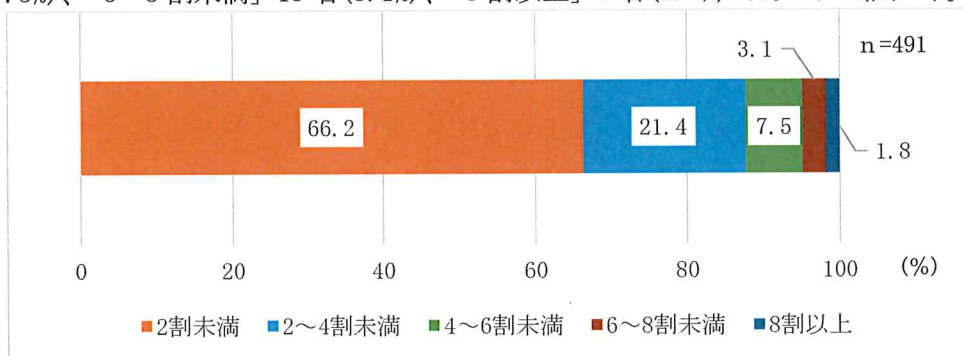


図28 丸飲み

③前歯で噛み切ることができない

「2割未満」277名(56.4%)、「2～4割未満」117名(23.8%)、「4～6割未満」61名(12.4%)、「6～8割未満」17名(3.5%)、「8割以上」19名(3.9%)であった(図29)。

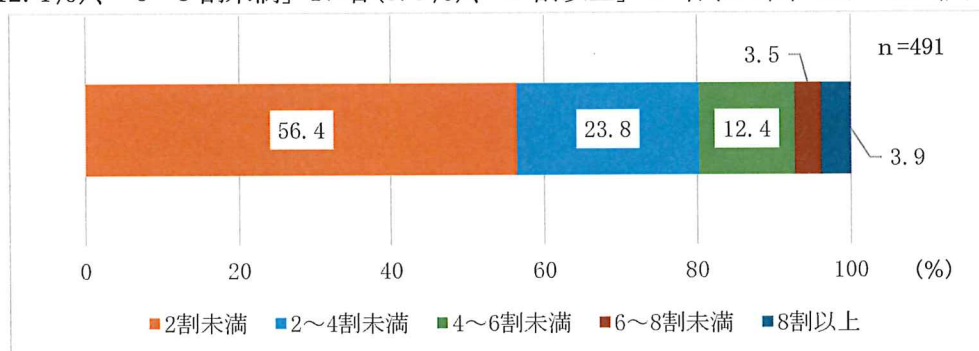


図29 前歯で噛み切ることができない

④舌を出しながら食事をする

「2割未満」391名(79.6%)、「2～4割未満」68名(13.8%)、「4～6割未満」24名(4.9%)、「6～8割未満」7名(1.4%)、「8割以上」1名(0.2%)であった(図30)。

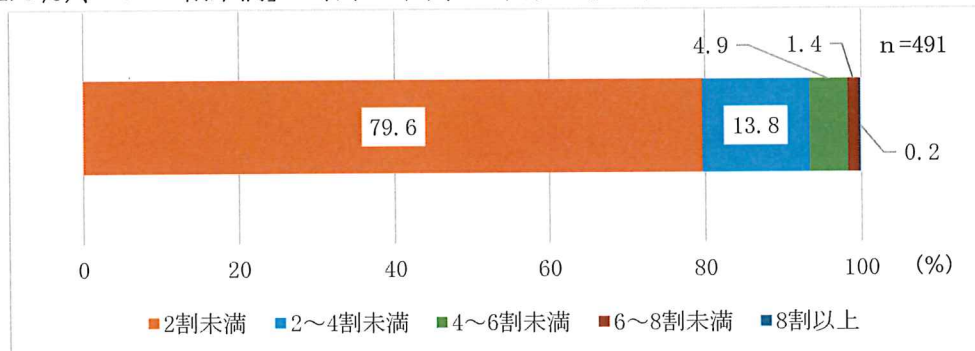


図30 舌を出しながら食事をする

⑤飲み込むのに時間がかかる

「2割未満」332名(67.6%)、「2～4割未満」128名(26.1%)、「4～6割未満」28名(5.7%)、「6～8割未満」3名(0.6%)、「8割以上」0名(0%)であった(図31)。

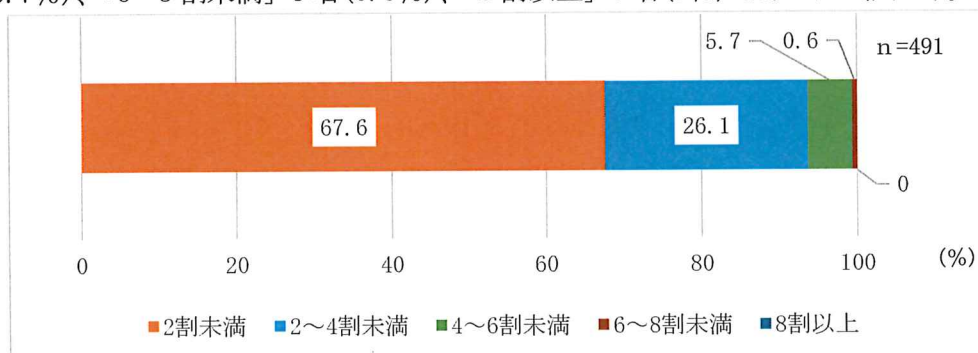


図31 飲み込むのに時間がかかる

⑥パサパサした食材は水分で流す

「2割未満」347名(70.7%)、「2～4割未満」105名(21.4%)、「4～6割未満」25名(5.1%)、「6～8割未満」9名(1.8%)、「8割以上」5名(1.0%)であった(図32)。

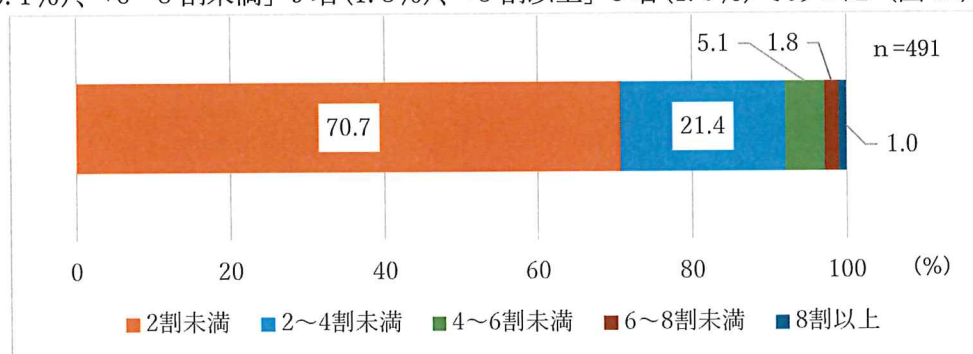


図32 パサパサした食材は水分で流す

⑦のどに詰まらせる

「2割未満」435名(88.6%)、「2～4割未満」48名(9.8%)、「4～6割未満」5名(1.0%)、「6～8割未満」1名(0.2%)、「8割以上」2名(0.4%)であった(図33)。

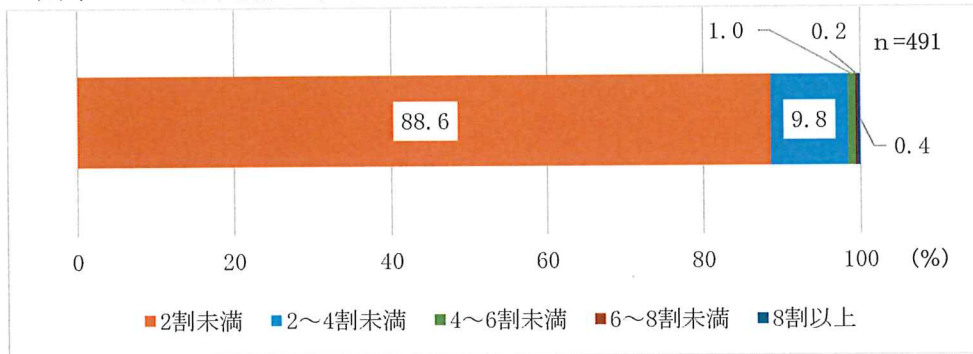


図33 のどに詰まらせる

⑧むせる

「2割未満」381名(77.7%)、「2～4割未満」92名(18.7%)、「4～6割未満」12名(2.4%)、「6～8割未満」4名(0.8%)、「8割以上」2名(0.4%)であった(図34)。

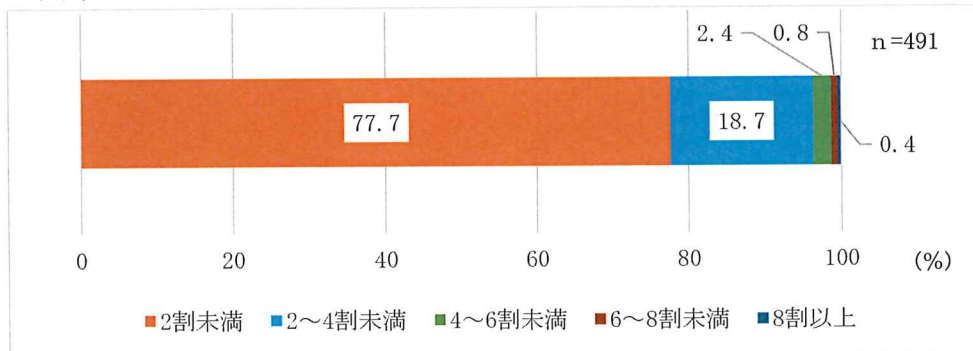


図34 むせる

⑨コップ飲みができない

「2割未満」433名(88.2%)、「2～4割未満」43名(8.8%)、「4～6割未満」10名(2.0%)、「6～8割未満」4名(0.8%)、「8割以上」1名(0.2%)であった(図35)。

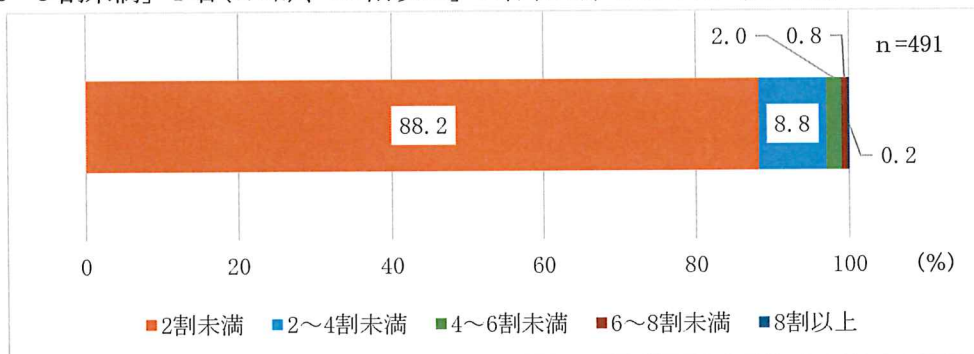


図35 コップ飲みができない

⑩ストローが使えない

「2割未満」375名(76.5%)、「2～4割未満」62名(12.6%)、「4～6割未満」30名(6.1%)、「6～8割未満」12名(2.4%)、「8割以上」12名(2.4%)であった(図36)。

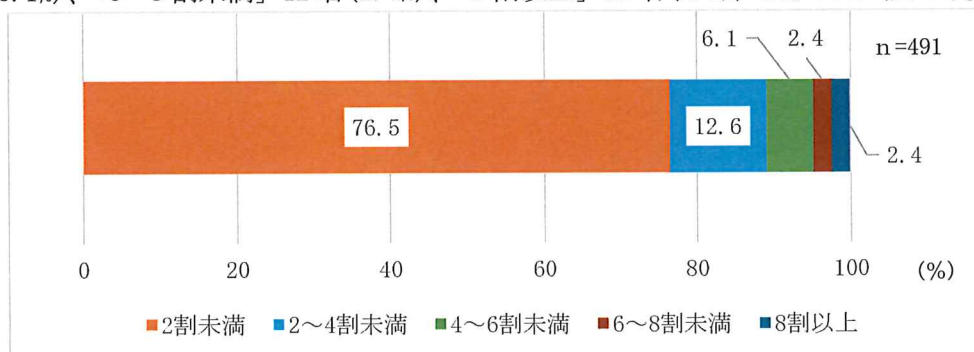


図36 ストローが使えない

3) 担当児童の食行動について気になることはありますか

①前かがみの姿勢や片足を椅子にのせるなどの姿勢が悪い

「2割未満」135名(27.5%)、「2～4割未満」170名(34.6%)、「4～6割未満」102名(20.8%)、「6～8割未満」49名(10.0%)、「8割以上」35名(7.1%)であった(図37)。

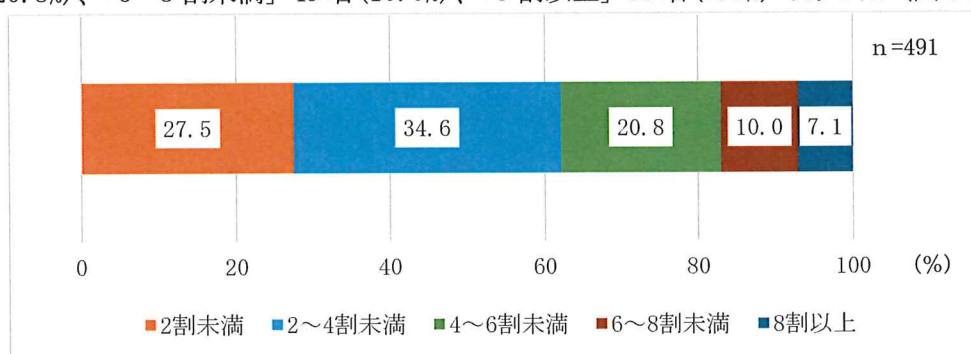


図37 前かがみの姿勢や片足を椅子にのせるなどの姿勢が悪い

②手づかみ食べ

「2割未満」243名(49.5%)、「2～4割未満」138名(28.1%)、「4～6割未満」59名(12.0%)、「6～8割未満」37名(7.5%)、「8割以上」14名(2.9%)であった(図38)。

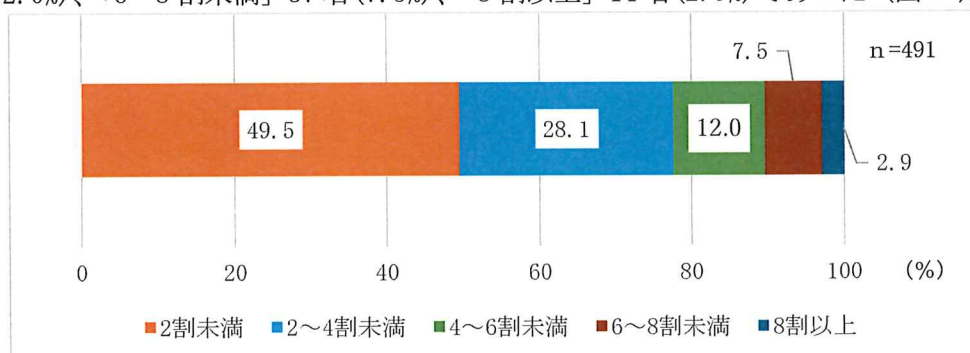


図38 手づかみ食べ

③食具が正しく持てない

「2割未満」108名(22.0%)、「2～4割未満」130名(26.5%)、「4～6割未満」107名(21.8%)、「6～8割未満」62名(12.6%)、「8割以上」84名(17.1%)であった(図39)。

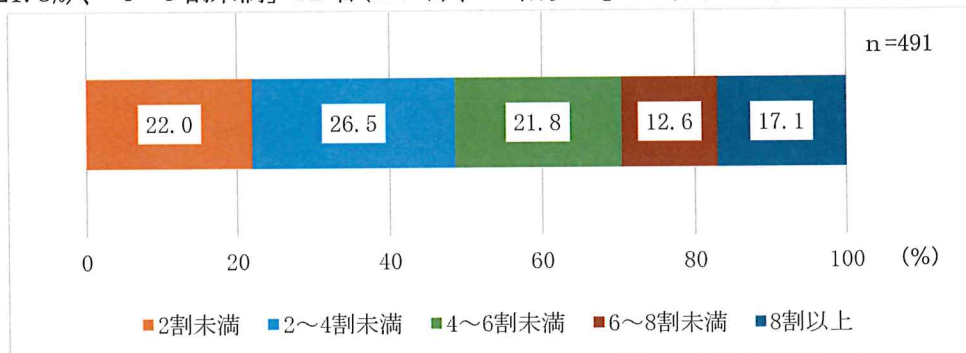


図39 食具が正しく持てない

④食具の使用状況について

・スプーンを使用

「2割未満」27名(5.5%)、「2～4割未満」34名(6.9%)、「4～6割未満」63名(12.8%)、「6～8割未満」53名(10.8%)、「8割以上」314名(64.0%)であった(図40)。

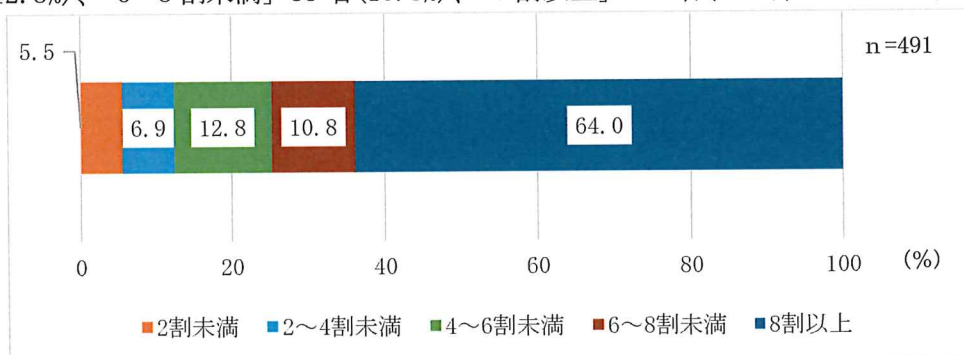


図40 スプーンを使用

・フォークを使用

「2割未満」71名(14.5%)、「2～4割未満」63名(12.8%)、「4～6割未満」81名(16.5%)、「6～8割未満」55名(11.2%)、「8割以上」221名(45.0%)であった(図41)。

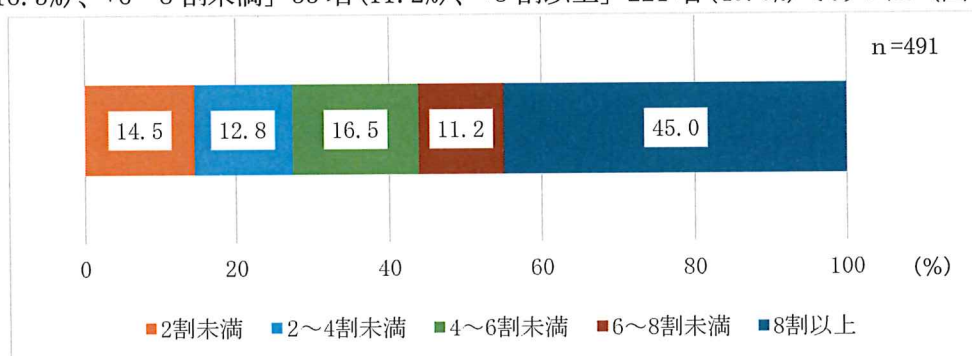


図41 フォークを使用

・補助的な箸を使用

「2割未満」383名(78.0%)、「2～4割未満」80名(16.3%)、「4～6割未満」20名(4.1%)、「6～8割未満」5名(1.0%)、「8割以上」3名(0.6%)であった(図42)。

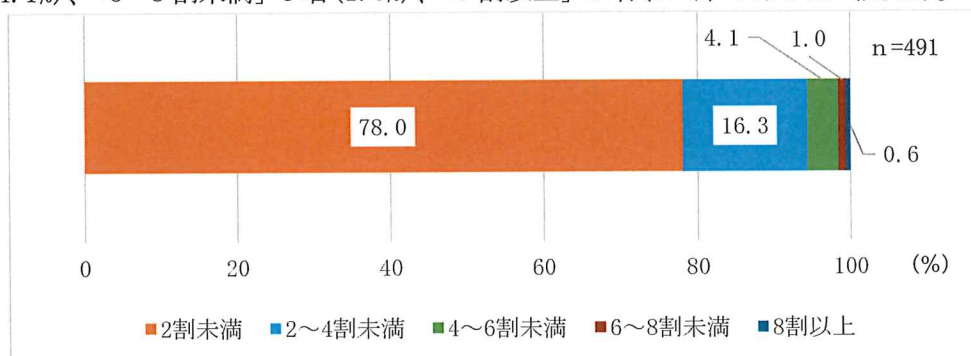


図42 補助的な箸を使用

・普通の箸を使用

「2割未満」370名(75.4%)、「2～4割未満」60名(12.2%)、「4～6割未満」33名(6.7%)、「6～8割未満」16名(3.3%)、「8割以上」12名(2.4%)であった(図43)。

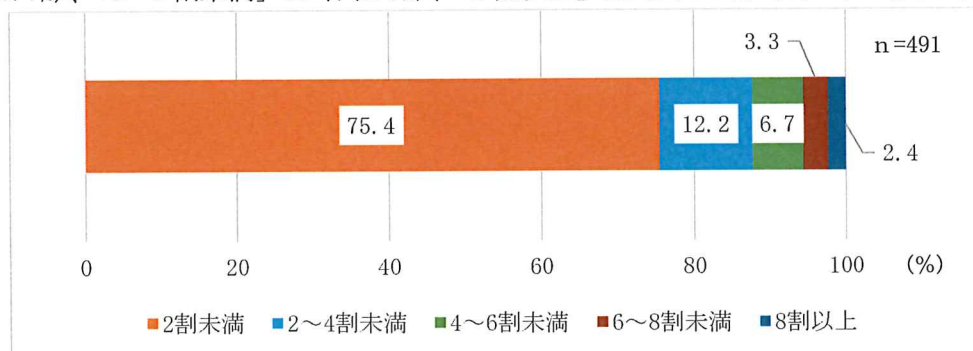


図43 普通の箸を使用

⑤食べこぼし

「2割未満」94名(19.1%)、「2～4割未満」138名(28.1%)、「4～6割未満」105名(21.4%)、「6～8割未満」80名(16.3%)、「8割以上」74名(15.1%)であった(図44)。

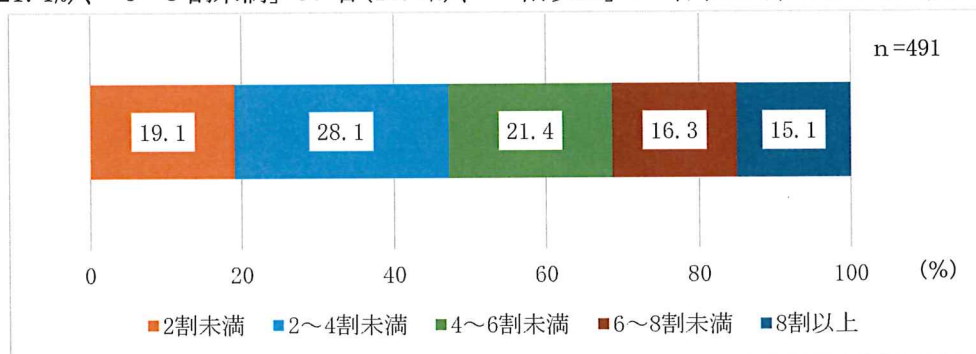


図44 食べこぼし

⑥早食い

「2割未満」139名(28.3%)、「2～4割未満」189名(38.5%)、「4～6割未満」97名(19.8%)、「6～8割未満」47名(9.6%)、「8割以上」19名(3.8%)であった(図45)。

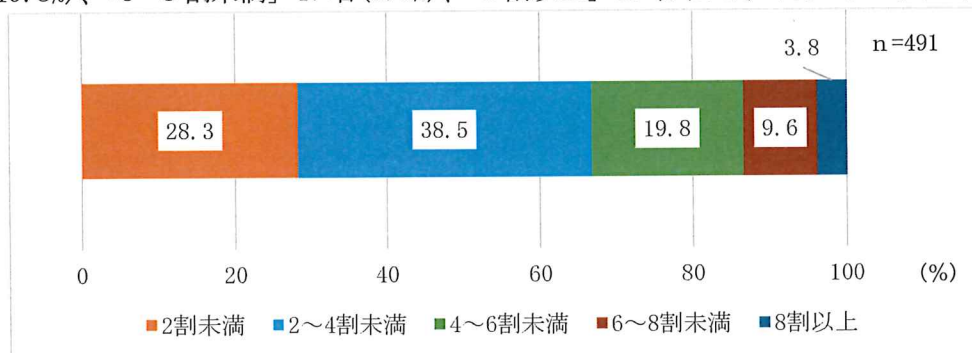


図45 早食い

⑦遊び食べをしている(食事に集中しない)

「2割未満」292名(59.5%)、「2～4割未満」122名(24.8%)、「4～6割未満」52名(10.6%)、「6～8割未満」20名(4.1%)、「8割以上」5名(1.0%)であった(図46)。

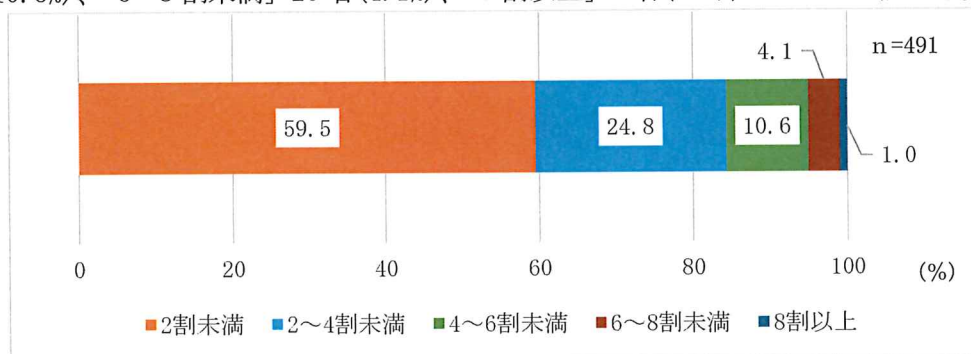


図46 遊び食べをしている(食事に集中しない)

⑧給食時間内に食べ終わらない

「2割未満」272名(55.4%)、「2～4割未満」125名(25.5%)、「4～6割未満」68名(13.8%)、「6～8割未満」18名(3.7%)、「8割以上」8名(1.6%)であった(図47)。

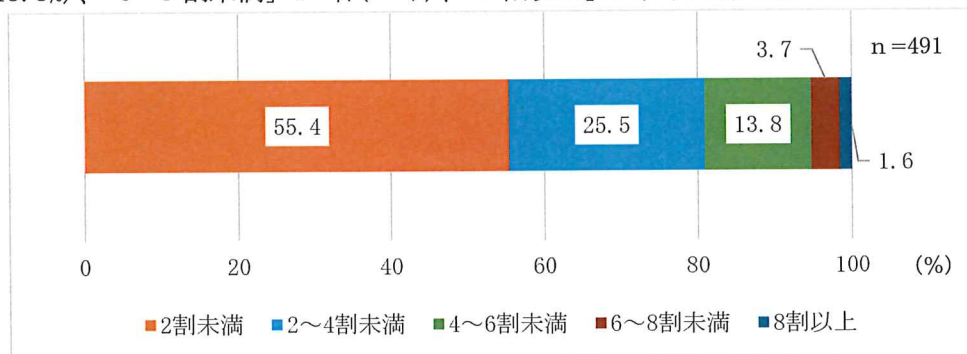


図47 給食時間内に食べ終わらない

⑨偏食

「2割未満」163名(33.2%)、「2～4割未満」126名(25.7%)、「4～6割未満」102名(20.8%)、「6～8割未満」51名(10.4%)、「8割以上」49名(9.9%)であった(図48)。

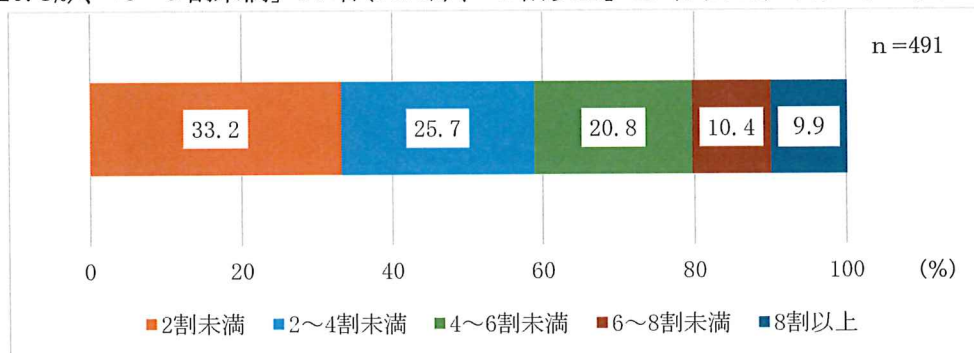


図48 偏食

4) その他

①当センターで「学校教職員等研修会」が実施されていることを知っていますか。

「はい」125名(25.0%)、「いいえ」366名(75.0%)であった(図49)。

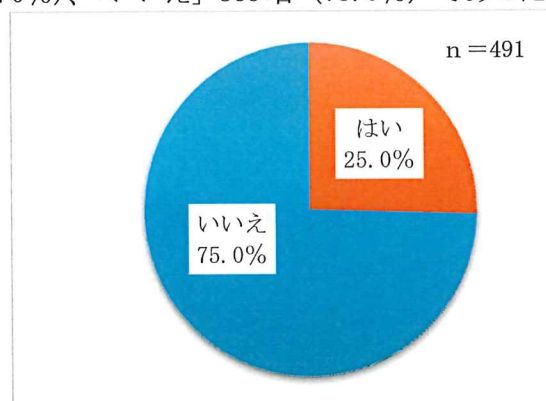


図49 当センターにおける「学校教職員等研修会」実施の認知度

②当センターの研修会に参加したことはありますか。

「はい」48名(10.0%)、「いいえ」443名(90.0%)であった(図50)。

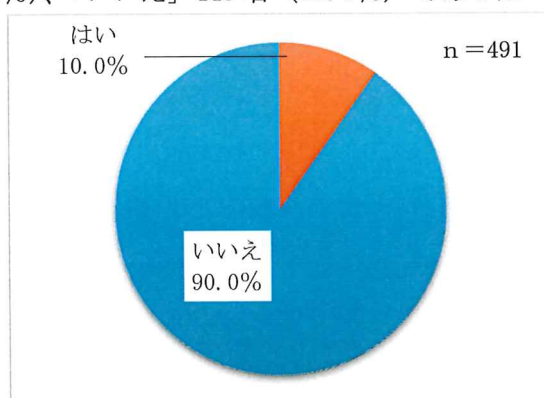


図50 当センター研修会の参加

③「はい」の場合どのような方法で知りましたか（複数回答）。

「他の職員から聞いた」25名(39.7%)、「案内文」22名(35.0%)、「センターのホームページ」11名(17.4%)、「その他」5名(7.9%)であった（図51）。

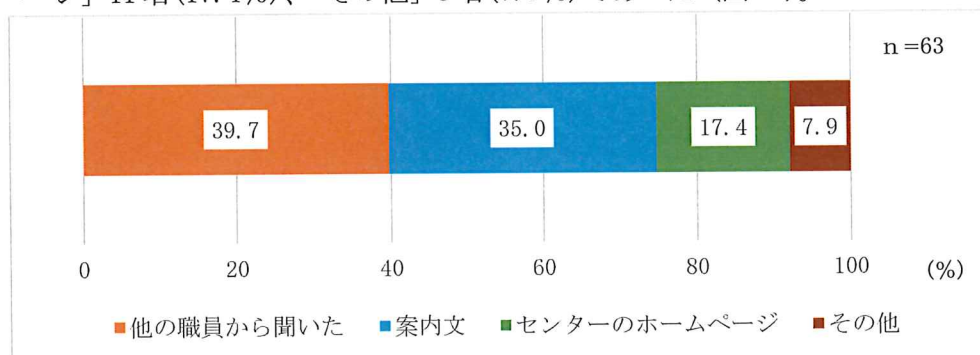


図51 「はい」の場合どのような方法で知りましたか

【その他】

- ・学校の掲示板 ・食育リーダーの会 ・前任校で受講 ・学校からの案内
- ・校内研修 ・他の職員から聞いた

④当センターの研修会に関する要望はありますか

自由記載

- ・摂食指導（介助方法）や口輪筋向上のための取り組みなど具体例についてHP等で教えていただけると参考になりありがたいと思います。
- ・若手教員でも分かるような内容だと嬉しいです。
- ・偏食指導に関しての研修の充実。
- ・夏休みに実施希望。 ・学校への出張勉強会。 ・機会を作って参加したい。
- ・オンデマンド。 ・オンラインが受けやすい。
- ・夏季休業中に学校で研修して頂きたい。
- ・研修会という形のほかに学校にきていただき実際に摂食指導をしてもらいたい。またはそういったことをしていただける機関や人の紹介など。
- ・研修会の通知があれば検討したいと思います。
- ・知的障害の学校には摂食に関する知識や指導できる人が少ない。
- ・知的能力障害の特別支援学校でも積極的に摂食指導を行ってほしい。
- ・摂食の問題もありますが現場は人手不足で危険な状況となっています。教育委員会への危険を知らせる対応をお願いしたいです。
- ・学校給食で多くを求めても対応はできない上に指導範囲ではないと。子どもたちが安全にたべるために人が足りないのは事実ですが、それは摂食指導に人が足りないのではなく、安全面の見守り含めて教員が足りません。

3. 考察

(1) 学校全体の質問

①人数については、26校の合計「児童数」4,372名、「教員」1,447名であった。

②校内職員への「食育」についての取り組み（研修）については、26校中15校

(58.0%) で取り組んでいるが、全学校では行っていない結果であった。「食育」は給食を通じた栄養摂取にとどまらず、食べることを生きる楽しみとして感じる時間であり、家族や仲間との触れ合いや団欒を経験させる機会でもある。こうした視点を踏

まえ、学校においてもできる限り積極的に取り組む必要がある。

- ③定期的に食事に関する専門的な指導を受けているかについては、「ない」が1校で、25校で年に1回から毎月受けているという結果であった。学童期の児童は認知機能および運動機能の発達が著しいため、定期的な摂食嚥下機能評価と指導が必要である。
- ④食事に関する専門的な指導については、「摂食指導に係わる歯科医師」が18校、「言語聴覚士」10校であった。摂食指導に関して、小児期は歯および口腔領域の発育と共に食べる機能が発達することから、飲み方や咀嚼習慣をこの時期に育成することが大事である。今後は、歯および口腔機能の専門である歯科医師も指導を行えるようになることが望ましい。
- ⑤栄養教諭または校内所属の栄養士による栄養指導については、栄養指導を行っていない学校が15校（58.0%）と半数以上の結果であった。身体の成長が著しい学童児に対しては、肥満や低栄養を踏まえた上でのアプローチも必要である。
- ⑥食事の際のアクシデントについては、「ある」4校（15.0%）であった。
- ⑦アクシデントの事象については、「窒息」3校（75.0%）、「誤嚥」1校（25.0%）であった。
- ⑧窒息予防、対処に関する校内職員への研修を行っているは、「はい」19校（73.0%）で全学校では行っていない結果であった。

以上のことから、知的特別支援学校（小学部）では、食事の楽しみの食育、窒息・誤嚥しないための安全な給食の提供について学校全体でより一層取り組んでいくことが大切であると考えられた。

(2) 教員への質問

1) 教員、児童の基本事項

- ①職歴（知的障害児の担当になって）については、「3年未満」136名（27.7%）と「10年以上20年未満」137名（27.9%）でそれぞれ30%弱であり、他の職歴年数と比較して多かった。全体における職歴年数は、「3年未満」から「20年以上」と幅広い回答者であった。
- ②担当している児童の年代については、アンケート対象者の教員491名は、「低学年（1、2年生）」185名（37.7%）、「中学年（3、4年生）」156名（31.8%）、「高学年（5、6年生）」150名（30.5%）であり、全体的に平均した割合の回答であった。
- ③担当しているクラスは何名かについては、「5名」119名（24.2%）、「6名」184名（37.5%）で61.7%と約半数以上であった。教員1人あたりの担当している人数の平均は4.6名の結果であった。
- ④給食時には、何名の児童を担当しているかについては、「1名」21名（4.3%）、「2名」102名（20.8%）、「3名」150名（30.5%）、「4名」69名（14.1%）、「5名」75名（15.3%）で85%、平均は3.6名の結果であった。

以上の質問③④からは、公立特別支援学校の小学部は6名が標準との報告¹⁾もあり、今回の結果から給食時に教員が児童に声かけができ、見守られる人員配置ができていると考えられた。

- ⑤食事場面で困ると思うことはあるかについては、「ある」157名（32.0%）、「まあまあある」237名（48.3%）で、394名（80.3%）の教員が困ることがあるとの結果であった。
- ⑥質問⑤で困ると思うことはどんな内容かについては、「介助方法」251名（38.0%）が

一番多かった。

- ⑦給食の食形態については、「切らないでそのまま（普通食）」747名（33.1%）、「一口大（普通食）」1,044名（46.2%）で普通食での食形態の提供が多かった。
- ⑧水分にトロミをつけている児童については、「2割未満」480名（97.8%）で、ほぼ水分にトロミはつけていない結果であった。
- ⑨水分を十分に摂れてない児童は「2割未満」419名（85.3%）であり、今後も1人1人の児童に対して水分が摂れない要因を分析し、脱水症状にならないように対応する必要がある。
- ⑩食べ物のアレルギーがある児童は、「はい」152名（31.0%）との結果から定期的に家庭との情報共有が引き続き必要である。
- ⑪栄養状態（ローレル指数や体形などから）について気になる児童については、「はい」272名（55.0%）の結果で、ほぼ半数の結果であった。
- ⑫質問⑪で栄養状態（ローレル指数や体形などから）について気になる児童は、肥満の児童「2割未満」175名（64.3%）、肥満傾向の児童「2割未満」173名（63.6%）、やせ気味の児童「2割未満」190名（69.9%）であった。肥満、肥満傾向、やせ気味の3項目全て「2割未満」が約70%との結果であり、栄養管理についても注意を払う必要がある。
- ⑬給食で困ったときに相談できる方はいますかについては、「はい」444名（90.0%）であった。
- ⑭相談相手は、「校内所属の栄養士」（111名）、「摂食指導に係る歯科医師」（99名）、「言語聴覚士」（90名）が多かった。また、その他としては先輩教員、同僚も多く学校内でのコミュニケーションが図られていると思われる。
- ⑮家族と学校で食形態の違いはありますかについては、「はい」143名（29.0%）で食形態に関する相違があることが認められた。学校では安全な食形態を提供することが多いためであると考えられる。
- ⑯摂食に関する勉強会があれば受けていたいですかについては、「はい」433名（88.0%）であった。
- ⑰定期的な専門職からの摂食指導は必要と感じますかについては、「はい」450名（92.0%）であった。

以上の質問⑤～⑰からは、食事場面で困ることで最も多かったのは、「介助方法」であった。これは噛むことや早食いをしないための声かけおよび食具の使い方などと思われる。困ることの2番目に多かった「食事時間」の結果は、食事に対する集中力が低いことが挙げられ、給食という限られた時間内に食事をすることも必要な経験であると考えられる。「食形態」については、学童期の児童の認知機能および運動機能の低さ、口腔機能の未発達および歯の交換期の問題が挙げられる。給食の食形態については、切らないでそのままか、一口大でも普通食が多い結果であったが、「水分にトロミをつけていない」や「水分を十分にとれていない」児童は少ない結果であった。栄養状態について気になる児童は55.0%に認められたことから、肥満、栄養不足や脱水等を予防する観点から、より一層の配慮が求められる。

給食で困ったときに相談できる方は90.0%でほぼ存在する結果となった。「摂食に関する勉強会があれば受けたい」が88.0%、「定期的な専門職からの摂食指導は必要と感じる」が92.0%の結果であった。今後も摂食指導に係る歯科医師、学校歯科医と相談して、定期的に機会を設けて摂食に関する研修を企画する必要があると考えられた。

2) 担当児童の摂食嚥下機能について気になること

摂食嚥下機能の主訴として多いのが、「嚙まない、丸飲み」が挙げられ、この食べ方は窒息、誤嚥のリスクが高いため、教員が気にしていると思われる。今回、摂食嚥下機能について気になることとして、①「嚙まない」、②「丸飲み」、③「前歯で嚙み切ることができない」、④舌を出しながら食事をする」、⑤「飲み込むのに時間がかかる」、⑥「パサパサした食材は水分で流す」、⑦「のどに詰まらせる」、⑧むせる、⑨「コップ飲みができない」、⑩「ストローが使えない」の10項目の全てで2割未満が最も多かった。本アンケートの(2)教員への質問 1) 教員、児童の基本事項の質問 ④「給食時は、教員1名に対して何名の児童を担当」についてでは、「1名から5名まで」が85%、多くて7名、平均3.6名という結果であることから、教員が給食時に配慮すべき児童は多くはない。しかし、特別支援学校(小学部)では、少数であっても窒息や誤嚥のアクシデントが起こる可能性を念頭に児童と接する必要があると思われる。

以上のことから、①「嚙まない」、②「丸飲み」などの項目で、気になる児童がいれば食べ方に注意をして声掛けをする必要がある。可能であれば学童期の小学部の時期に咀嚼訓練を行い、咀嚼運動の獲得を食事場面での目標の一つとすることが有用であると考えられる。③～⑩項目で気になる児童がいれば口唇や舌の動きを確認し、専門職に相談のうえ、必要に応じて医療機関につなげることも必要である。

3) 担当児童の食行動について気になること

食行動の気になることの多くは、「姿勢、食具の使い方、早食い」が挙げられる。⑨「偏食」以外の食行動の4割未満は、①「前かがみの姿勢や片足を椅子にのせるなどの姿勢が悪い」305名(62.1%)、②「手づかみ食べ」381名(77.6%)、⑥「早食い」328名(66.8%)、⑦「遊び食べをしている」(食事に集中しない)414名(84.3%)、⑧「給食時間内に食べ終わらない」397名(80.8%)の5項目は60%以上であった。さらに、食具については、③「食具が正しく持てない」238名(48.5%)、⑤「食べこぼし」232名(47.2%)であった。④「食具の使用状況について」は、スプーンおよびフォークはそれぞれ8割以上で最も多く使用しており、補助的な箸および普通の箸はそれぞれで2割未満が最も多い結果となった。

⑨「偏食」については、当センターの外来指導時や研修会でも質問が多いことから偏食への対応は、五感から克服するための提案や少しずつ食べない食べ物に慣れていくことを、児童の知的機能の発達とともに見守っていく必要がある。

以上の結果から、食行動における課題は主として食事マナーに関する事項であることが示唆された。介助なく自食できる児童も、こぼさずにきれいに食べられることが大切である。食具使用に関しては、上肢機能や手指機能の発達が影響している。スプーンおよびフォークはほぼ使用できているが、補助的な箸および普通の箸の使用は低いことが示された。食具を正しく使用できれば、かき込み食べをせずに一口量の調整ができることで、お迎え食べやかき込み食べが少なくなり、徐々に食べこぼしも減少も期待できると考えられる。

4) その他

当センターの研修に関する質問では、①「当センターで「学校教職員等研修会」が実施されていることを知っていますか」については、「はい」125名(25.0%)、「いいえ」366名(75.0%)であった。②「当センターの研修会に参加したことはありますか」に

については、「はい」48名(10.0%)、「いいえ」443名(90.0%)であった。③「はい」の場合「どのような方法で知りましたか」については、「他の職員から聞いた」25名(39.7%)、「案内文」22名(35.0%)、「センターのホームページ」11名(17.4%)、「その他」5名(7.9%)であった。④「当センターの研修会に関する要望はありますか」の自由記載の質問では、摂食指導(介助方法)、偏食、若手教員でも分かる研修内容、時期や開催場所等に関する記載があった。

以上の結果および自由記載から、摂食に関する勉強会や研修に対する一定のニーズが認められた。一方で学校および教員の勤務時間の制約も課題として挙げられることから、当センターで行っている地域派遣研修(特別支援学校等教職員、施設職員、保護者等、障害のある人に関わる方々を対象として、東京都内の障害者施設、高齢者福祉施設、特別支援学級に、歯科医師又は歯科衛生士が出向いて講義を行う研修)のさらなる周知および活用促進が必要である。

今回、学校および教員が日ごろ感じている食事場面での問題点や不安な点が確認できた。対象である児童は学童期であり、この時期から学校での生活時間が長くなり、知的能力や運動能力が高まるとともに自己コントロール能力も高まる。この時期の口腔内は第一大臼歯が萌出するなど乳歯から永久歯への交換が進む。そして、咬合することで咀嚼力や咀嚼効率がさらに高まることから、よく噛む習慣をつける必要がある。また、食べ方支援のためには食事に適した姿勢の保持が大切であることや、食具の箸の正しい使い方なども指導する必要がある。さらに、家族や友達と一緒に食事をする(共食)ことで、美味しさを共感することも大切である。これらを、学校や教員に認識してもらい、安心・安全で楽しい給食の時間になることが望まれる。そのため、摂食指導に関わる研修を定期的に開催することは重要と考えられた。本アンケート結果から、学校および教員からの摂食機能および食行動の問題点は、どの学校でも同様の傾向であることが示唆された。これらを基に、食事場面の問題点について困っている課題への対応方法なども踏まえ、当センターでの摂食嚥下機能療法の指導内容や研修の充実を図りたい。そして、学校ごとでも本アンケートを整理し、学校歯科医、食事に関する専門的な指導者および教員同士の情報共有として取り入れてもらうことを望む。今後も、障害のある方の食べることや歯科口腔保健の推進に取り組みたい。

参考文献

- 1) 内閣府. 令和7年版 障害者白書(概要): P43-63.

都立知的障害特別支援学校（小学部）における摂食機能および
食行動の問題点に関するアンケート

Ⅰ 学校全体の質問（１校につき１回答（例：担当教員））

① 人数についてお聞きします

1) 児童数（ 名）	2) 教員（ 名）	3) 看護師（ 名）
4) 栄養教諭（ 名）	5) 校内所属の栄養士（ 名）	6) 介護職（ 名）
7) その他（ ）		

② 校内職員への「食育」についての取り組み（研修）はされていますか

1) はい 2) いいえ

③ 定期的に食事に関する専門的な指導を受けていますか

1) 毎月 2) 3月に1回 3) 半年に1回 4) 1年に1回 5) 必要な時 6) ない
--

④ 食事に関する専門的な指導はどの職種から受けていますか（複数回答可）

1) 学校医 2) 学校歯科医 3) 摂食指導に係る歯科医師 4) 看護師
5) 歯科衛生士 6) 言語聴覚士 7) 作業療法士 8) 理学療法士 9) 栄養教諭
10) 校内所属の栄養士 11) いない 12) その他（ ）

⑤ 栄養教諭または校内所属の栄養士による栄養指導はされていますか

1) はい 2) いいえ

⑥ 食事の際のアクシデントはありましたか

1) はい 2) いいえ

⑦ 質問⑥で「はい」に回答した場合、アクシデントの事象についてお答えください（複数回答可）

1) 窒息 2) 誤嚥 3) アナフィラキシー 4) その他（ ）
--

⑧ 窒息予防、対処に関する校内職員への研修等を行っていますか

1) はい 2) いいえ

ご協力ありがとうございました

- ⑪ 栄養状態（ローレル指数や体形などから）について気になる児童はいますか

1) はい 2) いいえ

- ⑫ 質問⑪で「はい」の場合の児童について

肥満の児童

1) 2割未満 2) 2～4割未満 3) 4～6割未満 4) 6～8割未満 5) 8割以上

肥満傾向の児童

1) 2割未満 2) 2～4割未満 3) 4～6割未満 4) 6～8割未満 5) 8割以上

やせぎみの児童

1) 2割未満 2) 2～4割未満 3) 4～6割未満 4) 6～8割未満 5) 8割以上

- ⑬ 給食で困ったときに相談できる方はいますか

1) はい 2) いいえ

- ⑭ 質問⑬で「はい」の回答の方はどなたに相談していますか

1) 学校医 2) 学校歯科医 3) 摂食指導に係る歯科医師 4) 看護師
5) 歯科衛生士 6) 言語聴覚士 7) 作業療法士 8) 理学療法 9) 栄養教諭
10) 校内所属の栄養士 11) いない 12) その他 ()

- ⑮ 家庭と学校で食形態の違いはありますか

1) はい 2) いいえ

- ⑯ 摂食に関する勉強会があれば受けたいですか

1) はい 2) いいえ

- ⑰ 定期的な専門職からの摂食指導は必要と感じますか

1) はい 2) いいえ

B 担当児童の摂食嚥下機能について気になることはありますか

- ① 噛まない

1) 2割未満 2) 2～4割未満 3) 4～6割未満 4) 6～8割未満 5) 8割以上

- ② 丸飲み

1) 2割未満 2) 2～4割未満 3) 4～6割未満 4) 6～8割未満 5) 8割以上

- ③ 前歯で噛み切ることができない

1) 2割未満 2) 2～4割未満 3) 4～6割未満 4) 6～8割未満 5) 8割以上

- ④ 舌を出しながら食事をする

1) 2割未満 2) 2～4割未満 3) 4～6割未満 4) 6～8割未満 5) 8割以上

⑤ 飲み込むのに時間がかかる

1) 2割未満 2) 2～4割未満 3) 4～6割未満 4) 6～8割未満 5) 8割以上

⑥ パサパサした食材は水分で流す

1) 2割未満 2) 2～4割未満 3) 4～6割未満 4) 6～8割未満 5) 8割以上

⑦ のどに詰まらせる

1) 2割未満 2) 2～4割未満 3) 4～6割未満 4) 6～8割未満 5) 8割以上

⑧ おせる

1) 2割未満 2) 2～4割未満 3) 4～6割未満 4) 6～8割未満 5) 8割以上

⑨ コップ飲みができない

1) 2割未満 2) 2～4割未満 3) 4～6割未満 4) 6～8割未満 5) 8割以上

⑩ ストローが使えない

1) 2割未満 2) 2～4割未満 3) 4～6割未満 4) 6～8割未満 5) 8割以上

C 担当児童の食行動について気になることはありますか

① 前かがみの姿勢や片足を椅子にのせるなどの姿勢が悪い

1) 2割未満 2) 2～4割未満 3) 4～6割未満 4) 6～8割未満 5) 8割以上

② 手づかみ食べ

1) 2割未満 2) 2～4割未満 3) 4～6割未満 4) 6～8割未満 5) 8割以上

③ 食具が正しく持てない

1) 2割未満 2) 2～4割未満 3) 4～6割未満 4) 6～8割未満 5) 8割以上

④ 食具の使用状況について

・スプーンを使用

1) 2割未満 2) 2～4割未満 3) 4～6割未満 4) 6～8割未満 5) 8割以上

・フォークを使用

1) 2割未満 2) 2～4割未満 3) 4～6割未満 4) 6～8割未満 5) 8割以上

・補助的な箸を使用

1) 2割未満 2) 2～4割未満 3) 4～6割未満 4) 6～8割未満 5) 8割以上

・普通の箸を使用

1) 2割未満 2) 2～4割未満 3) 4～6割未満 4) 6～8割未満 5) 8割以上

⑤ 食べこぼし

1) 2割未満 2) 2～4割未満 3) 4～6割未満 4) 6～8割未満 5) 8割以上

⑥ 早食い

1) 2割未満 2) 2～4割未満 3) 4～6割未満 4) 6～8割未満 5) 8割以上

⑦ 遊び食べをしている（食事に集中しない）

1) 2割未満 2) 2～4割未満 3) 4～6割未満 4) 6～8割未満 5) 8割以上

⑧ 給食時間内に食べ終わらない

1) 2割未満 2) 2～4割未満 3) 4～6割未満 4) 6～8割未満 5) 8割以上

⑨ 偏食

1) 2割未満 2) 2～4割未満 3) 4～6割未満 4) 6～8割未満 5) 8割以上

D その他

① 当センターで「学校教職員等研修会」が実施されていることを知っていますか

1) はい 2) いいえ

② 当センターの研修会に参加したことはありますか

1) はい 2) いいえ

③ 「はい」の場合どのような方法で知りましたか

1) センターのホームページ 2) 案内文 3) 他の職員から聞いた
4) その他 ()

④ 当センターの研修会に関する要望はありますか

()

ご協力ありがとうございました